

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 羽田 康一

本論文は、ギリシア・ローマ時代の大型ブロンズ彫刻に関する製作技術と彫刻作品の意味内容を解明しようとする研究であり、1972年に発見された「リアーチェのブロンズ A,B」を中心に10件14点の作例を対象としている。

古代のブロンズ彫刻の製作技術に関する研究は、種々の科学分析法を駆使して近年めざましい発展を遂げている。著者は個々の作品の発掘経緯を詳細に調査するだけでなく、最新の科学分析データを収集することによって、60年代までは分析困難だった製作技術、鑄造技術、製作過程、それに使用されているブロンズの組成を明らかにしている。とくに、科学分析によるデータをいかに解釈するかは、古代のブロンズ彫刻に関する考古学的、美術史的理解が必要であり、著者はバランスのとれた解釈を展開している。

製作技術に関する本論文の新知見としては、鑄造技法である失蠟法が直接失蠟法によるのかそれとも間接失蠟法によるのかを個々の作品ごとに考察している点であり、十分な説得性をもって解明されている。

対象作品である14点のブロンズ彫刻を相互に比較できるよう、原型の製作、牝型の製作、鑄造原型の製作など15項目の製作段階を明示し、それぞれのブロンズ彫刻に関してそれらの各段階を克明に記述している。技法に関する客観的な記述によって、大きさ、材質、図像が異なる個々のブロンズ作品の比較が可能となり、その結果、14点のなかに1点、現代のレプリカが含まれていることも明らかにしている。本論文以前にもレプリカの可能性を指摘する研究論考が存在していたが、厳密なクライテリアの設定によってより明確にレプリカであることを断定する結果となっている。

以上が製作技術を中心とする論考であり、それにもとづきながら彫刻作品の意味内容が考察されている。この考察の中心課題は「文学・演劇と同じく美術においても、先行作品から継承した諸要素との葛藤のなかで創作が行われるのであり、先行作品からどの部分、どの要素を継承したかを解明することが、ギリシア美術の展開を解明する際の基本である」とする著者の考えに典型的に表れている。この課題を解明するため、著者は徹底した先行作品と類似作品の収集に努め、個々の継承部分と創作部分の解明を行っている。

以上が、本論文の約8割をしめる各論の内容であり、それにもとづく総論が論文の冒頭を占めている。詳細克明な個別作品の研究にもとづく総論であるため、古代のブロンズ彫刻に関する製作技術の総括ともいえる内容である。しかし、著者が本論文の目的とした製作技術の解明による作品の意味内容の探求は、かならずしも十分な成果をもたらしているわけではなく、さらなる研究が必要である。そのような問題点があるとはいえ、古代の大型ブロンズ研究に関して新しい貢献を果たしたことは十分に認めることができる。よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するものであるとの判断に達した。